研究課題　中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係―石見国妙義寺を中心に―

研究経費　三五万七四二〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　中司健一（益田市歴史文化研究センター）

　所内共同研究者　西田友広

　所外共同研究者　目次謙一（島根県古代文化センター）・福田善子（山口県立美術館）・濱田恒志（島根県立古代出雲歴史博物館）・角野広海（島根県立石見美術館）

研究の概要

（１）課題の概要

　島根県益田市の曹洞宗妙義寺は、中世以来の歴史を誇り、中世のものも含め豊富な古文書を伝える。それらは一部が『曹洞宗古文書』や『中世益田・益田氏関係史料集』に収録されているが、まだその全体像は示されていない。  
　妙義寺は、中世に益田氏の菩提寺であったこと、中国地方の曹洞宗の中核的な寺院である大寧寺との緊密な関係、末寺である益田市域の多くの曹洞宗寺院との関係、江戸時代における三隅の龍雲寺や津和野藩との末寺の帰属をめぐる問題、一方で広域的な文化交流の様相など、中世・近世における曹洞宗寺院の支配者や他寺院との関係について非常に興味深い事例を多く見いだすことができる。  
　そこで、本共同研究では、妙義寺文書や所蔵する文化財について学際的に調査し、目録化・活字化を進めるとともに、関連する寺院等の文書や文化財もあわせて調査することで、研究資源化と中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係について考察することとしたい。

（２）研究の成果

　（１）妙義寺釈迦十六羅漢図について  
①美術史的価値：作者は雪舟流の人物と思われ、高麗仏画や、雪舟を介して受け継がれていた禅月様十六羅漢図や蔡山筆羅漢図の図像・描法を参照しつつ、描いたと思われる。  
②歴史的背景：安土桃山時代に妙義寺が中興された際に、中興開山として招かれた大寧寺の関翁珠門が寄進した可能性が高い。江戸時代に津和野藩や龍雲寺との関係の中で、本末関係が動揺した際に、結束を再度強めるために修復が行われる。  
（２）大寧寺とその文化財  
美術品は貴重な作品が多く見られたが、益田家お抱え絵師永冨家の作品が多くあることが注目される。中世末期に益田氏が寄進したという仏像三体は、画像による所見であるが、一七世紀後半を遡ることはない、という評価を得た。墓地には、益田元祥以降の歴代益田氏当主の墓が所在する。総じて、益田家と非常に関わりが非常に深いことが改めて確認された。  
（３）益田兼房氏所蔵文化財  
①衣冠姿の益田元祥像：さらなる調査が必要であるが、一七世紀代のものである可能性が高く、作者等がわかれば益田家の文化性がさらに明らかになる可能性がある。  
②伝益田元祥所用の帷子：一七世紀初頭を下らないものであり、服飾史上も注目される。  
（４）総論  
　中世から近世の益田氏・益田家の、同規模の領主と比較してもかなり高水準の文化性、特に雪舟と深く関わり、その技法の継承や名声の確立に少なからず貢献したことがうかがわれた。  
　益田氏・益田家は戦国時代から曹洞宗、特に大寧寺に深く帰依し、大寧寺から中興開山を招いて妙義寺が中興された。江戸時代になると、妙義寺は益田氏という庇護者を失い、龍雲寺との関係の中で本末関係が動揺する。益田氏・益田家は旧領である益田の寺院への経済的・文化的支援を行っていた様子もうかがわれた。